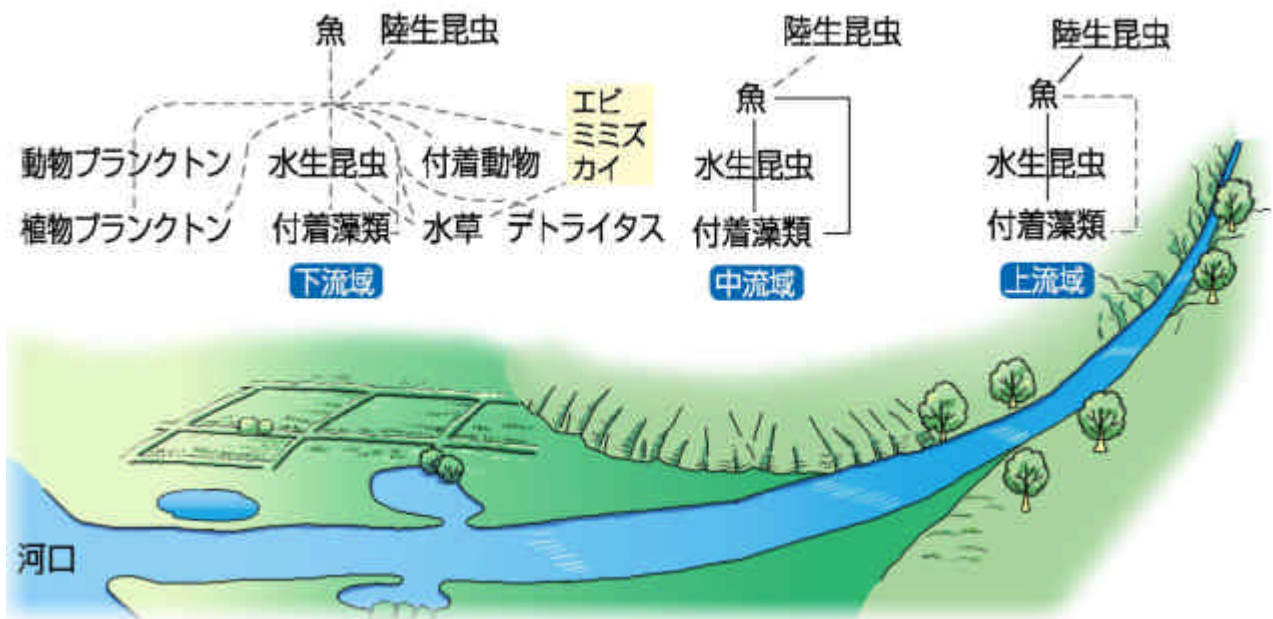


3 - 4 魚類の河川縦断方向の変化

魚類も、上流、中流、下流では出現する種が異なります。魚類の場合は、餌の条件と水温の条件が、河川縦断方向の分布に大きく関係しています。

植物と同様に、動物も環境に応じて出現する種が変わります。



(「河川の生態学」、築地書館) を基に作成

上流から下流への食物連鎖と河川景観の変化

(上流域)

上流域では、川は険しい谷を流れ、その地形と周辺の樹木に遮られて日射量が少なくなります。そのため、付着藻類を食べる魚はほとんど見かけません。付着藻類の薄い層を巧みに食べることができる水生昆虫が付着藻類を食べ、その虫を食べるアマゴやタカハヤなどの肉(昆虫)食魚が渓流で多く見られます。また、水温も低いことから、このような冷水性の魚が生息しているのです。このような環境は、川の堆積作用よりも、侵食作用の方が大きいことが成因です。



アマゴ



タカハヤ

(中流域)

砂州が交互に広がり、一日中日が当たる中流になると、アマゴやタカハヤは見られなくなり、代わりにニゴイやカマツカ、シマドジョウといった淵で生活する肉食者が登場します。また、アユやオイカワ、ヨシノボリ類など、藻食や藻食に強く傾いた雑食魚が瀬で見られます。



ニゴイ



カマツカ



シマドジョウ



アユ



オイカワ



シマヨシノボリ



カワヨシノボリ



オオヨシノボリ

(下流域)

堰より下流の汽水域では、干潟とヨシ原が広がります。干潟には、トビハゼなどがみられます。下流では、餌やすみ場所が著しく多様化し、汽水・海水魚から淡水魚まで、多様な種と多くの魚類をみることができます。



トビハゼ



マハゼ



スズキ



ボラ



コトヒキ



クサフグ

吉野川では、池田ダムから河口にかけて、平成8年度に河川水辺の国勢調査（魚類調査及び底生動物調査）が実施されました。調査結果から、池田ダムから下流には、中・下流域に出現する魚種が分布していることがわかりました。上流域に出現するアマゴやタカハヤは、池田ダムより下流ではみられません。つまり、池田ダムから下流には、上流域の環境が、ほとんどないと考えてよさそうです。

底生動物調査結果をみると、汽水域には水生昆虫がほとんど出現しないため、汽水域は淡水域より出現する種類数が少ない状況にあります。逆に魚類は、河口域に汽水及び海水魚が出現するため、淡水域よりも汽水域の方で、より多くの魚種が確認できます。このように、汽水域と淡水域とでは、出現する生物が異なります。また、第十堰の湛水域では、止水域に出現するタナゴ類がみられますが、流水域ではみられません。止水域及び流水域の違いはありますが、第十堰から池田ダムまでの区間に出現する魚種は、ともに中・下流域に広く分布している種が確認されています。

魚類及び底生動物の分布状況から、第十堰から池田ダムまでの区間では、類似した分布状況を示します。植生の区分やセグメント区分と同様です。